

想像の遊び友達——その多様性と現実性——

Imaginary Playmates: their Diversity and their Reality

麻 生 武

目 次

1. はじめに	3
(a) 「想像の遊び友達」現象の一般性	3
(b) 欧米における研究の動向	5
(c) 「想像の遊び友達」現象はなぜ興味深いのか?	7
2. 「想像の遊び友達」についての調査の方法とその目的	8
(a) 目的	8
(b) 調査の方法	8
3. 「想像の遊び友達」の調査の結果とその分析	10
(a) 「想像の遊び友達」現象の定義とその発生率	10
(b) 「想像の遊び友達」現象の様々なタイプ	11
A 1, 「秘密の友達」タイプ:	A 2, 「もう一人の私」タイプ:
B 1, 「白昼夢・ドラマ」タイプ:	B 2, 「メルヘン・妖精」タイプ:
C 1, 「神様・保護者」タイプ:	C 2, 「妖怪・怪人」タイプ:
D 1, 「実在の人物」タイプ:	D 2, 「亡き人」タイプ:
(c) 「想像の遊び友達」のリアルさについて	22
①「姿が見えた否か」, ②「声が聞こえたか否か」, ③「リアルであったか否か」	
(d) 「想像の遊び友達」の共有について	28
4. まとめと今後の課題	30
引用文献	32

1. はじめに

(a) 「想像の遊び友達」現象の一般性

ある子どもが、部屋の片隅で何やら誰かと議論するような口調でしゃべっていたとしよう。あなたは、その子どもの相手確かめようと部屋の片隅を見る。ところが、そこには誰もいない。あなたが、もし少しでも発達心理学を学んだことがあるならば、子どもは人形とでも会話しているのだらうと推定し、子どもの正面に人形あるいは擬人化されそうな物体がないか目で探してみるかもしれない。しかし、そのようなものは子どもの周囲のどこにも存在していない。これは、一体どうしたことだろうか。子どもの心はここに在らず、空想のイメージの世界をさまよっているのだろうか。つまり、子どもは白昼夢に浸っているのだろうか。そこで、あ

想像の遊び友達

なたはそのことを確かめようと、その子に「今、誰としゃべっていたの」と尋ねたとしよう。その子はその問いによって我にかえるかと思うや、それどころか、堂々と「トムとしゃべっていた。トムに虫取りに行こうと誘ったのに、魚取りがいいといったので。」と応えたとしよう。あなたにはトムの姿などどこにも見えない。子どもはもっと過激なことを言う。食事の時、テーブルのその席には誰も座っては駄目だと言い張るのである。なぜならば、そこにはトムが座るのだから。そして子どもは、おやつの時また食事の時にトムの席にも食器を並べさせるのである。もし、このようなことが実際に起ったとすれば、あなたは一体どう思うだろうか。

そんな子は、頭がどうかしている、気がふれているのだ、と考える人もいるかもしれない。確かに、姿の見えない人物を見えているかのように主張することは尋常なことではない。しかるに、欧米では以上のように子どもが振舞ったとしても、それは子どもが「想像の遊び友達 (imaginary playmate)」あるいは「想像の仲間 (imaginary companion)」を持っていることを示しているものとして、一般の人々に受け入れられているのである。このことは欧米の児童文学において「想像の遊び友達」を主題にした数多くの作品が存在していることや、また、「想像の遊び友達 (仲間)」をテーマにした諸研究 (Hurlock & Burnstein, 1932, Svendsen, 1934, Ames & Learned, 1946) から理解できる。それらの研究において、子どもたちが「想像の遊び友達」を持つことは基本的に発達途上における正常な現象とみなされている。Ames と Learned (1946) たちによると、子どもが「想像の遊び友達」を持つことは普遍的に見られ、しかも人々に広く関心を持たれている現象である。彼らは、心理学の幼年期とも言える19世紀にすでにそれに関する3つの文献を数えることができるのに、それ以降「想像の遊び友達」についての研究が少ないことを指摘している。その約30年後にも、全く同様の指摘がなされている。Manosevitz ら (1973) は、子どもの両親や作家や詩人たちの「想像の遊び友達」についての関心の高さに比して、児童心理学者の関心が低く、それについての組織だった研究が少ないと述べている。研究の少なさについては後にまた触れることにし、ここでは以上の諸データによって、欧米では「想像の遊び友達 (仲間)」が一般に知られた、しかも人々の通俗的関心を少なからず引き付けている現象であることを確認しておきたい。

では日本では、この現象はどのようにとらえられているのだろうか。あるいはこの現象はそもそも存在しているのだろうか。私の知る限り「想像の遊び友達」・「想像の仲間」をテーマにした研究論文は、一つも存在していない。また、欧米の児童文学の作品に親しんでいる人と心理学関係の人を除けば、「想像の遊び友達 (仲間)」という現象を、公的な社会的に名付けられた現象として認知している人は皆無であるように思われる。日本では、そのような現象を指し示す日常用語は存在していない。私は、15年ほど前からこの現象に関心を抱き、データや文献をうまく集めることができるならば、この問題についてじっくり考察してみたいと考えていた。しかしながら、ごくごく稀に「想像の遊び友達」を持っていた病理的な事例や健常児の事

想像の遊び友達

例についての情報を見聞きすることはあっても、その頻度はきわめて少なく情報の内容も断片的なものにすぎなかった。そこで、私はいつのまにか次のように思い込んでしまっていた。日本は、欧米に比べて家屋は小さく部屋も狭い。また、欧米では乳児といえども個室で一人で寝かせられるのに対して、日本では子どもがかなり大きくなっても川の字型に寝ることが多い（我妻洋・原ひろこ、1974）。日本の子どもは、欧米の子どものように時間と空間を一人で占有している機会が少ない。よつて、孤独と自立に早くから親しむ欧米の子どもたちには「想像の遊び友達」が見られるのに対し、集団と協調の世界に生きる日本の子どもたちには「想像の遊び友達」がほとんど見られないのであろうと。

結論から先に言えば、以上のような私の思い込みは間違っていた。日本にも「想像の遊び友達」を持つという現象は、特異な例外的事例としてではなく、ある程度一般性をもった現象として存在しているのである。本論は、そのことを示す調査の第一報である。しかしながら、本研究で用いた「想像の遊び友達」についての調査方法は、従来の欧米の諸研究の調査方法と全く異なっている。また、研究における問題意識もかなり相違している。本研究の位置を明確化するために、まず欧米の研究の動向を以下において簡単に概観しておくことにする。

(b) 欧米における研究の動向

「想像の遊び友達」についての最初の組織的な研究は、Hurlock たち (1932) の研究である。彼らは、「想像の遊び友達」を持っている子どもたちはそれを秘密にして人に言わないため研究が難しく、この分野には児童心理学者の手がほとんどつけられていないことを指摘し、その上で既存の諸研究をレビューしている。それらによると、「想像の遊び友達」は3～4歳あるいはそれ以下から見られ始め、子どもが学校に入学したり現実の友達を持つようになると消失する。時には17歳まで「想像の遊び友達」が存続する事例も存在する。どのような子どもたちが「想像の遊び友達」を持つかについては諸説ある。想像力のある孤独な子どもであるという説や、愚鈍な子どもにはまったく見られないという説や、期間の長短はあってもほとんどすべての子どもたちが「想像の遊び友達」を持っているはずだという説などがある。だが、これらの既存の研究はすべて、研究者が親しい被験者に過去のことを語ってもらった事例や、「想像の遊び友達」を持っている子どもの観察事例の寄せ集めでありデータに客観性を与えようとする努力がなされていない。そこで彼らは、701名の高校生・大学生（年齢の中央値は18歳と19歳との間）に「想像の遊び友達」についての質問紙による無記名の調査を行なったわけである。「想像の遊び友達」の有無についての設問は、「あなたはかつて想像の遊び友達を持っていましたか」という何の説明もない単純な質問である。その結果、女子は31%が、男子は23%が「想像の遊び友達」を持っていた記憶があった。さらにこのうち「想像の遊び友達」を恒常的な遊び友達にしていたのは、女子で50%（つまり全女子の15.5%）男子で46%（つまり全男子の10.6%）であった。「想像の遊び友達」が初めて出現した時期は、女子の場合5歳と

想像の遊び友達

7歳との間が一番多く、男子の場合はこれより少し遅れ、7歳と9歳との間に3分の1が初めて「想像の遊び友達」を持っている。Hurlock たちは、女子の一人っ子に「想像の遊び友達」を持つ子が多い傾向はあったものの、田舎に住んでいたか都会に住んでいたか・兄弟の人数・子ども時代の友達の数・両親がそろっているか否かなどは、「想像の遊び友達」の有無には関連していなかったと結論している。

Hurlock たち (1932) と対照的な方法を用いた研究は、Svendsen (1934) の研究である。彼女は「想像の仲間」を次のように定義している。「それは目に見えない主人公で、名前がつけられており、ある一定の期間少なくとも数ヶ月の間存在し、人との会話の際にそれについて言及されたりあるいは直接の遊び相手となる。その持ち主である子どもには、それはリアルな存在である。しかし、その目に見える客観的な基礎となるものなどまったく存在していない。」(この定義によるとモノを人格化した想像遊びや子ども自身が何かのふりをするような想像遊びは、「想像の仲間」に含まれないことになる)。彼女は、母親の集まりに顔を出して「想像の仲間」を子どもたちが持っていたかあるいは今現に持っているか否かについて調査し、その結果「想像の仲間」を持っていた40名の子ども(内31名は10歳以下)を選びだし、その子どもたちに直接面談して「想像の仲間」について尋ねている。また母親とも面談し情報を集めただけでなく、学業・社会的適応・知能テストについての情報を学校からも集めている。また対照群として同じ地域の幼稚園児40名を用いている。彼女の調査によると生き生きとした長く存続する「想像の仲間」を持っていたのは、5歳以上の子どもの13.4%であった。「想像の仲間」が出現した時期は、40ケース中37ケースが4歳の誕生日前であった。出現の中央値は2歳5ヶ月であった。もう「想像の仲間」が消失してしまっていると親が報告した28名中22名が、6歳0ヶ月前に「想像の仲間」についてオープンに語るのをやめている。「想像の仲間」を持つのは、一緒に遊べる兄弟がいない子ども・特定の遊び友達のいない子どもであることが多く、また彼らは他児との関係において性格的な問題(例えば、内気・恥ずかしがり屋など)をかかえていることが多かった。彼らの知能は、平均すれば高かった。ただし、明らかに遅滞である子どもにも「想像の仲間」が存在している場合があった。

「想像の遊び友達(仲間)」現象についての基本となる研究は、以上の2研究であると言っても過言ではないように思われる。Hurlock たちの研究は回顧的な質問紙によるものであり、Svendsen の研究は子どもの親に面談し、また直接子どもに尋ねたものである。この2つの方法に、直接子どもの行動を観察する事例的な方法を加えれば、「想像の遊び友達」の研究方法的な基本的スタイルはつくされたと言える。その後の研究は、以上の3つのスタイルのいずれかを取っている。その後の焦点は、一体どのような子どもが「想像の遊び友達」を持つのかという点に向かっていくように思われる。Ames と Learned (1946) は様々な想像活動をする子どもたちの性格特性を記述し、Schaefer (1969) は800人の高校生を調査しかつて「想像の遊び友達」を持っていた者はそうでない者よりも文学的側面の創造性の高いことを明らかにして

想像の遊び友達

いる。Manosevitz たち (1973) は、就学前児の親から回収された228通の質問紙を分析し、「想像の遊び友達」を持つ子どもには一人っ子が多く、持たない子どもたちと比べ彼らは家で自分から遊びを開始することが多く、家族のメンバーと一緒に行動の種類が多く、特に男の子の場合はより大人と交流することに長けていることを明らかにしている。そして彼らは、「想像の遊び友達」を持つことと子どもの独立心・社会性・創造性・満足の遅延・役割取得・空想などの人格特性や能力と結びついている蓋然性が高いことを考えると、「想像の遊び友達」現象についての研究がかくも少ないことは驚くべきことだと述べている。欧米の研究者たちは、「想像の遊び友達」を持つ子どもがどんな子どもであるのかははっきりさせることこそが「想像の遊び友達」現象を解明する第一歩であると信じ込んでいるかのようである。彼らの視線は常にその点に向かう。しかしながら、Manosevitz たち (1977) は、「想像の遊び友達」を持っていた就学前児42名と持っていなかった対照群42名との知能指数・創造性・待つことのできる能力 (waiting ability) などを比較した結果、まったく有意差を見出せなかったのである。「想像の遊び友達」についての研究の意義を主張し研究の少なさを嘆いていた彼ら (1973) が、自らの手で「想像の遊び友達」の研究の脈のありそうに思われていた方向に決定的ダメージを与えた (1977) とも言える。この皮肉な事実が、欧米における「想像の遊び友達」に関する研究の困難な状況を物語っているように思われる。どんな子どもが「想像の遊び友達」を持つのかははっきりしなければ、現象を解明するのつかかりがないと考えているにもかかわらず、前者のことが一向にはっきりしないのである。知能・創造性・待つ能力との関連が示唆されなくなるや、今度は「想像の遊び友達」を持つことと仲間との協調性や愛他的な行動との関連性が指摘され始めている (Partington & Grant, 1984)。それはそれとしてきわめて興味深いことである。しかしながら、欧米の研究は相も変わらずどんな子どもが「想像の遊び友達」を持つのかというお馴染みの問いの周りをめぐり続けているように見える。

(c) 「想像の遊び友達」現象はなぜ興味深いのか？

「想像の遊び友達」は、欧米においては一般の人々に人気のあるテーマである。なぜ人気があるのかははっきりしている。話を聞くだけで、私たちが空想あるいはファンタジーの世界に誘われるからである。しかし、「想像の遊び友達」が空想あるいはファンタジーであること自体が興味深いのではない。その「想像の遊び友達」が子どもたちにとってある種のリアリティを持っていることが私たちの心を刺激するのである。私が実在と知覚しているものが他者には知覚できず、他者が実在と知覚しているものが私には知覚できないとすれば、それは非常に危機的な状況になる。おそらく、私と他者とのいずれかが正常ではないということになってしまう。それは事実であれば恐ろしいことである。しかし、私たちは夢の場合には、私の見る夢を他者が知覚しなくても何の不思議にも思わない。夢と現実の狭間は、いつの時代にも私たち人間の関心を引き付けてきた領域である。空想や幻覚と現実との狭間についてもしかりである。

想像の遊び友達

「想像の遊び友達」が興味深いのは、それが現実と空想との危険な狭間に位置しているからである。私たちはピーターパンが実在していたらと夢想することを好むと同時に、もしある人がピーターパンと本当に会話したと主張すればその人の話に耳を傾けつつその正常さを疑い始めるのである。「想像の遊び友達」を持つことには、なにがしかの危険な雰囲気もあり、それがまた刺激的なのだとも言える。例えば、今日でも「想像の遊び友達」を持つことを超能力と関連させた書物が存在したりするのである (Tanous & Donnelly, 1979)。

今まで見てきた欧米の心理学者の「想像の遊び友達」についての研究には、以上のような素人的な素朴な好奇心が反映されていないように思われる。「想像の遊び友達」現象の面白さは、現象それ自体の中にある。どのような子どもたちが「想像の遊び友達」を持つのかという問いは、決して問題の中心ではない。問題の中心は、私たちの目に見えないのに子どもにはそれがあたかも実在しているかのように扱われるという点にこそある。この現象は、私たちに現実とはそもそも何なのか・空想と現実とは何が違うのかという根本的な問いを投げ掛けているのである。この問いが本質的であるが故に、「想像の遊び友達」の現象が一般の人々の心をとらえるのである。本論では、そのような素朴な問いを大切に「想像の遊び友達」現象を分析していきたいと思っている。

2. 「想像の遊び友達」についての調査の方法とその目的

(a) 目的

日本においても「想像の遊び友達」を持つという現象が、特異な例外的ものとしてではなく、ある程度の一般性のある現象として存在しているのか否かを調査することが第一の目的であった。第二の目的は、「想像の遊び友達」を持つとしてもそれにはどのような形態があるのか、また「人形遊び」と「想像の遊び友達」を持つこととの間にはどのような類似性や差異が存在するのか情報を手に入れることであった。

(b) 調査の方法

今回の調査はきわめて自由度の高い与えられたテーマについての自由記述による調査である。これは厳密な推計学的方法論に基づく調査ではない。「想像の遊び友達」に関する欧米の研究では、今回の調査のような曖昧性を伴う自由記述式の調査はまったくないように思われる。これはおそらく、統計学的データの処理に適さない記述データをアカデミックな学問が好まないためである。しかしながら、「想像の遊び友達」という現象形態のはっきりしない、しかも存在しているのか存在していないのかも定かではない心的な現象を調査するには、それについて自由に記述してもらうという方法はかなり有効な利用価値のある方法であるように思われる。以下にその具体的手続きを述べることにする。

想像の遊び友達

被験者は某女子大学短期大学部初等教育科2回生58名と同じ大学の文学部教育学科2・3・4回生(主として2回生)96名の計154名である。それぞれ私の担当していた「発達心理学」と「発達心理学特講」の受講生である。「赤毛のアン」などの児童文学の作品を読んだことがありそれを覚えていた少数の者を除いて、彼女たちのほとんどすべての者が「想像の遊び友達」(その際私は「空想の友達」という表現も用いた)という言葉に耳にしたことがなかった。またその内容についても知らなかった。そこで私は調査に先立ち次のような「想像の遊び友達」についての説明を行なった。

本論の最初に紹介したような「想像の遊び友達」が欧米の児童文学ではしばしば登場し、一般の人々にもこの現象が知られており、Hurlock たち(1932)の研究論文によると欧米人の30%近くが子ども時代に「想像の遊び友達」を持っていたと報告されている。しかるに、日本では「想像の遊び友達」の研究もなく一般にも知られていない。しかしながら、昨年度の受講生の中に次のようなレポート(「自分の子ども時代の体験」云々というテーマ課題)を書いてくれた者がいた。「私が3歳ぐらいの時のことでよく覚えていることがあります。家の床下のコンクリートの壁に所々通風孔のように穴の開いているところがあり、そこから床下を覗くのが大好きでした。いつもその鉄格子の間から中を覗いては、「はーさん」と呼ぶんです。その場所は土の匂いが強烈にして、とても涼しい場所でした。床の下には何かがいると思っていたのか、毎日そこへ行っては「はーさん」と叫んでいました。私は「はーさん」というものを自分で想像して存在していると信じていたようです。当時私は見えないものや抽象的なもの、お化けや幽霊をすごく恐がっていました。「はーさん」が恐くなかったことを考えると、私にとって「はーさん」は具体的なもので、目に見えていたのだと思います。」このレポートを読み、私は日本の子どもたちにも「想像の遊び友達」が例えばこの「はーさん」のような形で存在しているのではないかと思い調査してみようと思い立ったのである。学生たちにこのように伝え、夏休み中の課題として「想像の遊び友達(空想の友達)あるいは人形遊びについて」レポート用紙3枚のレポートを前期テストの替わりとして夏休み開けに提出してもらうように要求したのである。その際、さしつかえない限りできるだけ「想像の遊び友達」を持っていたか否か、持っていたならばその声が実際に聞こえたか、姿は実際に見えたかについても書いてほしいことなども伝えた。「想像の遊び友達」についてどうしても書きたくなかったり、それを持っていなかった場合には、「人形遊び」について書いてもらえばよい。自己の体験について必ずしも書かなくてもよい。理論的に考察してもらってもよい。と以上のように伝えた。なぜもっと単刀直入に質問紙等を利用して調査しないのか、なぜかくもまどろっこしい手続きを用いるのか、疑問を持たれた方もいるかもしれない。しかしながら、「想像の遊び友達」は非常にプライバシーや個人の秘密にかかわるかもしれない話題である。特に日本ではその存在すら一般に認知されていないのである。そのような個人の内奥にかかわるかも知れぬことを、イエス・ノーの質問紙で調査することに私はなにかふさわしくないものを感じた。Svendsen (1934)

は、彼女が「想像の遊び友達」について親に色々質問しその結果親が子どもの「想像の遊び友達」に興味を持ってしまい、子どもが「想像の遊び友達」と遊ばなくなってしまったケースがあったことを報告してしている。科学や研究という大義名分のために、被験者一人一人の内面世界が踏みじられてはならないように思う。私自身もそのことを忘れないようにしたい。事実、「想像の遊び友達」について書くのを非常に躊躇し、「人形遊び」について書こうかさんざん迷ったあげくによく「想像の遊び友達」について書くことにしたと述べている被験者も1名いた。また「想像の遊び友達」を持っている人が他にもいることを知って、自分が精神病ではなかったと安心したと書いていた者も少なからずいた。

3. 「想像の遊び友達」の調査の結果とその分析

本論では、先に述べた調査の一部「想像の遊び友達」に関するデータのみを分析する。「人形遊び」に関しては後日項を改めて論じる予定である。

(a) 「想像の遊び友達」現象の定義とその発生率

何を「想像の遊び友達」と定義するのか、Partington と Grant (1984) が指摘しているように、従来の諸研究においてもはっきりしていない。論者によって定義が食い違っていたり、はっきり定義していない研究があったりする。一番明確で厳格な定義は本論の1.(b)で紹介した Svendsen (1934) の定義である。しかし、重要なことは、決して「想像の遊び友達」を恣意的な基準で明確に操作的に定義することではない。大切なのは、「想像の遊び友達」と呼びたくなるような現象にはどれほどの幅と多様性があるのかということを明示的に示すことである。今回の調査の結論を先に語れば、「想像の遊び友達」現象は決してはっきり境界づけられる輪郭のはっきりした現象ではない。白昼夢に近いようなものもあれば、きわめて「人形遊び」に近いものもある。また、そのリアリティに関しても、その本人が実在ではなく空想だと自覚していたものもあれば、実在のように感じていた「想像の遊び友達」もある。実に多様である。従来の欧米の研究では「想像の遊び友達」をあたかも明確に定義できる現象であるかのように扱いきり過ぎていたきらいがある。「想像の遊び友達」現象は、私的な形で現象することからも分かるように、本来的に曖昧さを伴った現象である。

とは言え、ある程度操作的に定義して語ることも従来のデータと比較するためには必要なことではあるように思われる。本人が誰かのふりをしたり (impersonation)、何かを生命のあるものにみたとしたり (personification)、白昼夢 (day-dream) を見たりすることと「想像の遊び友達」を持つこととは、きわめて似かよったところがある。しかし、本論ではそれらを区別し、本人が誰かのふりをしたり、単に空想の物語をイメージしたり、人形や草木などの非生命的物質を生命の在るものとして扱う擬人化やアニミズムではなくて、物質的根拠の何もない所

想像の遊び友達

に他者的な人格の存在が半ばリアルに想定され本人がその他者的人格とコミュニケーションする場合、その他者的人格を「想像の遊び友達」として定義したい。この定義は、「想像の遊び友達」のリアルさについて本来的な曖昧さを認めている点に特徴がある。つまり Svendsen (1934) の定義との違いは、名前があること・数か月以上存続すること・リアルであるということなどの3条件について、そのような厳しい条件を緩和した点にある。とくにリアルさということが、イエス・ノウで判定しにくく、本論で後に扱うようにそれ自体が研究のテーマになりうることを考えれば、このような条件の緩和は妥当なことのようと思われる。

「想像の遊び友達」を持っているものの人数は、154名中25名つまり16.2%であった。調査の時点で今だに「想像の遊び友達」が存在しているように感じている者も5名いた。しかし、1～2名を除きそれらは非常にリアルな形で存在していたわけではない。むしろ、存在の気配とイメージの持続とでもいえるような曖昧な形で存続であった。それらは独特の守護霊あるいは人格の一部のようなものとして、その人の内面でその人自身と溶け合いつつあるようにも読み取れた。今回と同じように回顧的に「想像の遊び友達」現象を調査した研究には、Hurlock たち (1932) のと Shaefer (1969) の研究がある。「想像の遊び友達」の発生率は、前者では31% (女子) であり後者では10%～26% (女子) であった。Partington と Grant (1984) のレビューによると定義やサンプルの取り方で発生率は13%から65%までの幅がある。これらのことを考えるならば、本調査における16.2%という発生率は、日本においても欧米と同じくある程度一般的な現象として「想像の遊び友達」現象が存在していると語りうるパーセンテージであるように思われる。今回の被験者の年齢は19歳から22歳である (大半は20歳まで)。この年齢においてははっきり記憶されていたことから想像できるように、25名のほぼ全員が小学生ないし中学生の時に「想像の遊び友達」を持っていた。今回の調査の仕方では、出現時期の平均を算出できないが、「想像の遊び友達」の出現時期は同じく回顧的な方法による調査である Hurlock たち (1932) の結果に一番似かよっていた。

(b) 「想像の遊び友達」現象の様々なタイプ

「想像の遊び友達」の果たす具体的な役割・機能について、あるいは「想像の遊び友達」と子どもとの関係の在り方について、様々なタイプのあることが従来の研究でも指摘されている (Ames & Learned, 1946, Manosevitz, et al., 1973)。例えば、「想像の遊び友達」には、対等の遊び仲間・子どもよりも強くて賢い者・弱くて子どもに頭のあがらない世話されてばかりの者・子どもが日頃禁止されていることを自由にできる者・子どもの失敗などの責任を負わされる者などがいる。子どもが何かする前に「想像の遊び友達」に相談したりお伺いをたてることもあれば、逆に「想像の遊び友達」の方が何かする際に子どもに許可を求めてくる場合もある。また「想像の遊び友達」は、平和に仲良く遊ぶ相手のこともあれば意見が一致せず議論をする相手のこともある。このように様々な「想像の遊び友達」との関係の在り方が存在

想像の遊び友達

することは、現実の他者との関係が可能性として実に多様であることを考えればむしろ当然のことかもしれない。以上のような「想像の遊び友達」の役割や機能についての分類は、すべて子どもの親からの情報によっている。他者（子ども）の持っている「想像の遊び友達」と他者（子ども）との関係を外の（親の）視点から分類するかぎり、一般対人関係のカテゴリーを利用して語らざるをえないのだとも言える。その点、本研究の情報提供者は、かなりの表現力を持った当事者本人である。「想像の遊び友達」現象の様々なタイプとして本論で以下に述べることは、当事者のある種の内観報告に基づいていると言ってもよいかもしれない。それは、従来の諸研究で指摘されているような人間関係のパターンに基づく分類ではなく、現象自体の在り方に基づく分類である。「想像の遊び友達」といっても実に色々なものがあった。「秘密の友達」タイプ・「もう一人の私」タイプ・「白昼夢・ドラマ」タイプ・「メルヘン・妖精」タイプ・「神様・保護者」タイプ・「妖怪・怪人」タイプ・「実在の人物」タイプ・「亡き人」タイプなどがあった。このような分類は、私の知るかぎり「想像の遊び友達」の研究でなされてこなかったように思う。それぞれのタイプに重複して属するように見える場合や、分類したい場合もあった。また、今回の分類方法は、必ずしも最善のものではないかもしれない。以下において、各タイプの「想像の遊び友達」現象について順次、具体例と説明を加えていくことにする。

A1. 「秘密の友達」タイプ：これは最も一般的な「想像の遊び友達」である。本人より年長の場合も年少の場合もこれに含めることにする。また、遊び相手というより相談相手、あるいは当人の良き理解者や忠告者である場合もこのタイプに含めることにする。これは基準となるタイプであり、むしろこれとは違うタイプとの対比によって初めてこのタイプの性格を理解することができるように思われる。「想像の遊び友達」を持っていた25名中14名がこのタイプの友達を持っていた。具体例を以下に示す。

＜A1-1＞ 心の中のもう一人の自分と言うべきかもしれないような空想の友達はいた。髪の毛の長いフリルのワンピースを着た彫りの深い顔の目の大きな透けるように色白のリボンを付けた可愛い女の子だった。彼女が実在しているとは真剣に思っはなかった。私の心の中で作り上げた人物と自覚していた。名前はなかった、と言うより不必要だった。何時も側にいて「ねえねえ」・「あのね」と話しかけるだけで彼女と会話することができたからである。姿は見え（私にしか見えない）、彼女の声も聞こえた。透き通るような甘い可愛い声だった。彼女が時と場所を考えずに話しかけてくるので困ってしまったこともあった。友達と一緒にいる時や授業中にも話しかけてきた。返事をすれば周りの人たちに変に思われると考えて、心の中でつぶやく怒ったりした。人のいない時には声も出したりしたが、だいたいの場合は声を出さず心の中でつぶやくことによって会話した。心の奥底まで読み取られるので、彼女には嘘をつくことができなかった。中学の頃特に頻繁に彼女が現われていた。当時たくさんの友達がいたが親友はいなかった。人間関係で悩んだりしたことを彼女に話すことによって本当に助けられた。もしかしたら私以上に私のことを理解してくれたのかもしれない。現在、彼女はいない。今、私には本心を見せることのできる実際の友達がいる。

＜A1-2＞ 私の中学の頃に「トンデモネズミの大冒険」というテレビ番組があった。陶芸家の作っただけそこないのネズミの置物に命が吹き込まれ大活躍する話である。当時私はクラスの女の子といさか

想像の遊び友達

いを起こしてしまい、皆から除者にされ毎日つらい思いをしていた。私はトンデモネズミの明るく愛らしくしかも勇敢な姿に憧れていたのかもしれない。彼はしばしば、教室やトイレや掃除場所やロッカールームや私のポケットの中に現われた。いつも私の机の隅とか膝の上とか私の側に出現するという特徴があった。彼の声ははっきり聞いたわけではない。中学であったからそれが現実のこととは思わなかった。彼に名前すらつけていなかった。にもかかわらず、友達が私を避けひそひそしゃべっていたり、私一人がぼつんと椅子に座っていると、彼は私の側に現われ自分の楽しい体験談などを話してくれたような気がする。また彼とは「次の授業は……なんだけど、先生……だと思わない？」・「宿題の答これで良いかな？」などという日常的会話をよく話したようである。それはみな“……気がした”とか“つもりだった”という何ら実体を持たないものではあった。が、彼が何時も私の側にいてくれたことは、淋しい学校生活を送っていた私にはどれほど心の和むものであったかは測り知れない。私は彼を自分の都合の良い時にしか出現させなかったが（家では彼は現れなかった）、彼は何時も近くで見つめていてくれる心の友であった。トンデモネズミとは楽しいことしか話さなかったように思う。私が一つだけ物足りなかったのは、彼が私の心の中にしか存在しないため、彼自身の自主性がなかったことである。彼の出現期間は中一（13歳）のほんの1ヶ月にも満たない期間で、後は私がクラスの友人と仲直りしたために想像上の友そのものがいなくなり、以来このレポートが出るまで私自身すっかり忘れていた。

<A1-3> 小学校3年の1年間教会に通っていた。その時初めて“神様”という心の友達を持ったことを覚えている。しかし、転校して教会に行かなくなると友達の神様は薄くなっていった。そして、はっきりした友達のしずちゃんに出会った。一番長い友達で、今は話すことはできなくなったが今も私の近くにいるような気がする。私がしずちゃんに出会ったのは、“キューピットさん”や、それと似た“ダイリアさん” [いずれも「コックリさん」に似た占い遊び] が流行っていた時だった。ダイリアさんをしている際に“霊の乗り移り”が流行っており、その時私にも乗り移っていたのがしずちゃんだった。初め彼女には名前がなかったが、“ダイリアさん”で尋ねると「しず」と教えてくれた。その瞬間に、ドラエモンの「しずか」ちゃん顔が出てきた。それ以来、しずちゃんというピンク色の服を着て髪を2つにしてリボンで結んだ女の子が姿がポーッと浮かぶ。しずちゃんとは仲良しで一人ぼっちにいる時によく話をした。声はあったかよく覚えていないが、なかったように思う。でも返事はあったような気がする。友達と一緒にいる時はしずちゃんはいなかったが、一人になるとたちまちしずちゃんがでてきた。いつしずちゃんがいなくなったかはよく分からない。今でもしずちゃんがいらないとは思わないのに、しずちゃんに話そうとしないのはなぜだろうか。しずちゃんの後、日記をつけたりし、日記に自分の名前をつけ呼びかけたりしていた。日記をつける時ではないのに、日記が出てきたりもした。今は、しずちゃんとも日記とも話しはしないが、“何か”をする際には、自分にとって大切な誰かが出てくる。夢の続きのように存在する時もある。しかし、これは単にその人が気になるだけであって、しずちゃんや日記帳とは違うような気もする。

A2. 「もう一人の私」タイプ：大きなカテゴリーでくくれば、このタイプと前述した「秘密の友達」タイプとは基本的に同一タイプと言ってよいかもしれない。「もう一人の私」というのも、ある種の「秘密の友達」と考えることができる。また、ある種の「秘密の友達」は、「もう一人の私」にきわめて似かよっている場合もある。例えば、A1-1の事例などはその例である。しかし、ここでは両者を次のように区別することにしたい。その想像の仲間が、本人から分離し独立した他者的存在である場合には「秘密の友達」に分類し、それが本人の内部に潜んでいたり本人と瓜二つであったり同一の名前を持っていたりする場合に「もう一人の私」に分類することにする。つまり、その存在が空間的あるいは人格的に本人に近接したもの

想像の遊び友達

である場合に後者のタイプとみなすわけである。このタイプの「想像の遊び友達」を持っている者は、4名いた。A1の14名とこのA2の4名とを合わせると17名（A1とA2とに重複してカウンティングした者が1名いた）で、「想像の遊び友達」を持っていた者の68%になる。以下に例を示す。

<A2-1> 私は一人っ子で母親にべったりで、近所の子と遊ばず、母と一緒に折紙をしたりするのが大好きだった。4歳から幼稚園に行くようになったが、同年代の子どもたちと遊ぶのが苦手で、いつも園に行くのを嫌がり母を困らせていた。入園した頃から「にんぎょちゃん」と名づけた人形を本当の妹であるかのように扱い遊ぶようになった。しかし、いつしか彼女がいくら話しかけても応えてくれず表情も変えてくれないことに腹立ちを覚えるようになった。その頃から、母に本当の妹や弟が欲しいとねだるようになった。そして、いつのまにか、自分の心の中に空想の「人」が存在するようになっていた。彼女は目に見えないけれど、私がよく知っている人だった。姿形もよく知っているし、何より人形と違って彼女には感情があり、しかも私に話しかけてくれた。人形に替わって次第に私の心を占めるようになっていったのが、この「別の世界に住んでいる私にそっくりな女の子」である。今その存在の記憶は確かではないのだが、現実とは異質な別の世界（当時はその世界も現実と同様実在の世界だった）には、私と名前が同じで顔形も何もかも私にそっくりな「もう一人の私」が住んでいると思っていたことは今でもはっきり覚えている。私はその子に会ったことはないが、その子は私の世界を見通していて私のすべてを知っているのだと思っていた。一人ぼっちで淋しい時、親に叱られて悲しい時など、その子がどこからか見てくれて「あなたには“私”というあなたにそっくりな“私”がいるじゃないの、それなのにどうして一人ぼっちなの、一人じゃないでしょ、“私”がいるんだから」とか「悪いお母さんね、あなたの言い分も聞かないで怒るなんて、でも大丈夫よ。私はあなたのことを一番よく知っているのだから。あなたは悪くないのだから、悪いのはお母さんよ」など話しかけられているように感じていた。だから私も淋しい時や悲しい時は、心の中で呟いてこの子に話しかけたりしたものだ。話しかけるとこの子は必ず応えてくれた。そして、私の言い分を認め味方をしてくれた。彼女は私がいて欲しい時には必ず側にいてくれたし、何でも好きなようにさせてくれた。幼い頃のすべてを共有していたのが彼女であった。今振り返ってみると、この子は私の中に住んでいたもう一人の私ではなかつたらうかと思う。人は成長していくにしたがって、この心の中のもう一人の自分に気がつくようになるのだらう。そのような心の中のもう一人の自分が、私の肉体を離れ一個の個体として存在していたのが「別の世界に住んでいる女の子」だったのでないだらうか。

<A2-2> 中学生の時に空想の友達が存在した。名前は私と一字違いだった。なぜ似た名前だったかという、私と彼女とは双子だったからである。顔や姿形はもちろん性格や考え方もそっくりだった。ただ彼女の方がお姉さんだったので、時々私を叱ったりすることはあった。彼女は日記帳の中で生きていた。私は毎日の出来事を報告し、よく分からないことや困ったことがあると彼女に相談した。彼女は一生懸命考えてくれてそれでも分からないと、「先生に聞いたら？」などとアドバイスをしてくれた。彼女は私にとっては何でも話せるし何でも分かってくれる唯一の理解者だった。特に友達がいなかったかという事はなかったが、長女だったので親や友達よりも一歩近い兄や姉が欲しかったのだと思う。彼女は、実は私が頭の中ではどうすればよいのか分かっているのだが、自分の考えとしてはまともでないようなことを代弁してくれていたように思う。いつのまにか彼女はいなくなったが、なくなったのではなくて私のなかに同化したのだらうと思う。

B1. 「白昼夢・ドラマ」タイプ：白昼夢とは、眠っているのではないのに、あたかも夢でも見ているかのように空想に耽っている状態である。白昼夢を見ている者は、外から見ると

想像の遊び友達

目の前の現実の事象には注意を払わず心ここにあらずという状態である。白昼夢を見ることと「想像の遊び友達」を持つこととは、本質的に背反する事象ではない。ここでは、他者的な人格が半ば実体化してイメージされているだけではなく、その人物を取り巻く状況までイメージされて物語が生み出され、本人がドラマの世界の中にいるかのような状態になっているものを「白昼夢・ドラマ」タイプの「想像の遊び友達」と定義したい。簡単に言うと、人物だけではなく場面やストーリーも想像されているようなタイプの「想像の遊び友達」である。ただし、はっきり布団の中で眠りにつく前に想像されたり、想像と明確に意識されているものは純粋な白昼夢とみなし、このカテゴリーには分類しないことにする。B1タイプの「想像の遊び友達」は、3ケースあった。その内1ケース（B1-2）は、A1タイプからの移行として生じている。

<B1-1> 空想の友を持っているかと聞かれたら、私は即持っていたと答える。小・中学校が家から遠く40分かかったため、学校からの帰り道、友達と別れてから一人になると空想のドラマを考えて楽しんだ。ドラマはとても具体的でかつ一貫性があった。主人公は私の理想の女の子で、やさしく友達がたくさんいて何かのスポーツも得意で遊ぶのが好きなハリキリマンだった。その子にはやさしい父のいる暖かな家庭があった（家庭には不満はなかったが、私の父は仕事で忙しく相手してくれなかった）。彼女は、プールで25m泳げたり、家族で旅行したり、魔法が使え空を飛べたりもした。また、これとは別に、自分をシンデレラとかアンネ・フランクとかいった悲劇のヒロインに仕立て上げその世界に浸ることもあった。私はいつも空想の中で会話をしていた。声が聞こえたかどうかは分からないが、とにかく色々なことを話して満足していた。空想の友が実在するか否か、自分がどう考えていたかあまり覚えていないが、どちらの場合もあったと思う。空想と現実とが区別できなくなって、家族や友人の前で変なことを口走ってしまうこともあった。親から「この子はすぐ作り話をやるから」と言われていたように思う。人形遊びに夢中になったのは少し遅く小学校5年ぐらいからだ。空想遊びは、私一人の世界だったが、人形遊びは友達と共有することができた。それがとても嬉しかった。それまでは自分で私はちょっと異常だなと思っていたところがある。それがみんな同じだと分かって安心したのだと思う。

<B1-2> 小学校6年ぐらいからR子という空想の友達が心の中に現れるようになった。彼女は私が当時描いていた漫画の主人公だった。R子は活発で誰にも好かれる、私が絶対になれない理想の女の子だった。R子を想像して彼女と話をしていた時は、私の中で空想と現実がはっきりしていたからよかった。中学2～3年頃くらいいっそう孤独が強まると同時に、空想の友達との会話もますます多くなった。そして、夢と現実とが区別がつかなくなる状態に至ったりするようになった。机で勉強していたはずが、ふと気がつくと部屋の窓を開けて実在しない人の名を呼んで話をしていたり、そして自分まで時には暴走族、時には殺人者というようにめっちゃめっちゃ変化するようになる。話をしている舞台は多くは私の見聞きしたことの無い状況。しかし、現実と似た状況を想像している場合、一体どこまでが現実でどこまでが空想だったのかわからなくなってしまったりして、気が触れたのか心配だった。R子を理想にして彼女を頼りにして相談していた時は良かったが、中学2～3年の頃から私は主体というものが無く自分もどんどん変化し気分を満足させ、気がつくと後悔に似た嫌な気分になるのだった。R子以外のほとんどの登場人物の名前はその後すぐに忘れてしまう。そして、R子ができた時は大好きだったはずの空想の友達が、今ではいっそのこと出てきてくれなければよいとさえ思ってしまう。

<B1-3> 2～3歳の頃、ある夜私は不思議な光景を見た。私が寝ているとふっと騒がしい声に目を覚ました。見ると部屋の周りを私の玩具がロク々に自分の好きなことをしゃべりながらガヤガヤと行進しているのだ。私はそれを見て恐いとも何とも感じずにただぼんやりと眺めているだけだったが、何となく

想像の遊び友達

愉快そうでそれでいて少し気持ち悪く妙に淋しく胸を締めつけられるような気分になった。その出来事は一度では終わらずに何度も何度も続いた。私が母に、昨日玩具が部屋の周りをぐるぐる回っているのを見たと言っても、母はそうと言って笑うだけだったが、私はその光景を確かに見た。今思うと夢だったのかも知れないが（この事例は当人が他者の人格らしきものと直接コミュニケーションしていないので、厳密に言うところ「想像の遊び友達」の定義から外れているとも言える。しかし、当時彼女がまだ2～3歳であったことやB1-1、2との類縁性を考慮し、行進する玩具を知覚した際に生じた感情をそれらとのエモーショナル・コミュニケーションと広義に理解して、「想像の遊び友達」の事例の中にあえて含めることにした。この被験者は後に紹介するC1-3と同一の被験者である）。

B2. 「メルヘン・妖精」タイプ：主人公だけではなく彼（または彼女）を取り巻く状況までイメージされて物語が生み出されているという点では、このタイプの「想像の遊び友達」も基本的にB1と同様に「白昼夢・ドラマ」タイプとみなすことができる。ここでは、B2をB1から次の点で区別したい。まず、日常の延長上にあるドラマとメルヘンの物語を対比することを考えたい。後者には、王子様やお姫様や小人や妖精などといった特殊な人物が登場する。これらの特殊な人物は、その存在そのものが非日常性を示している。よって、「メルヘン・妖精」タイプの「想像の遊び友達」を持つことは、それを持つ子どもが現実世界と空想世界との間にかかっている特殊な橋を渡ったことに、本人自身が深層で自覚していることを示しているように思われる。これに対して「白昼夢・ドラマ」タイプの「想像の遊び友達」を持つ場合には、現実と空想とがどこか地続きになってしまう可能性が多く、それがB1の事例でみたようにそれを持つ本人にある不安を生じさせるように思われる。このタイプの「想像の遊び友達」を持っていた者は1名しかいなかった。Bタイプは、B1の3名とB2の1名とを合わせて4名にすぎなかった。これは、あくまで「想像の遊び友達」を問題にしようとしたためこのような結果になったのである。「白昼夢」をメインテーマにして調査すれば、白昼夢に浸っている（いたことのある）者の数は多く、その中には「想像の遊び友達」と非常に紛らわしい例も、今回の調査から考えられるよりもはるかに多く存在している可能性も少なくないように思われる。

<B2-1> 私には空想の友達がいた。記憶があるのは、幼稚園の頃からだと思う。当時から両親は共働きであったので、朝祖父母の家へ送られて、そこから幼稚園へ通い、夕方両親が迎えに来てくれるまで預かってもらっていた。年子の弟がいて、よく弟と遊んだが、よくケンカもした。そんな時は、しばらく一人で遊んでいた。その時空想の友達が登場するのであった。彼らは3人いた。小人の国の王子と王女と一人の家臣であった。王子も王女もまるで絵本に出てくるようにきれいな色の素敵な衣装をまとい美男美女であった。彼らの目はパッチリとしていて西洋系の顔をしていたが、瞳も髪も黒だった。彼らは絵本の人物とは違い、立体的であった。人間と同じ肉体を持っていた（なぜそれが分かったかというところ、人間と同じ生活をしたので、風呂に入る時に着ているものを脱いで裸になるからであった）。しかし、どこか人形のような冷たい雰囲気も備えていた。そして残りの一人の家臣であるが、彼だけは深緑色のみずぼらしい格好をしていてちょっと背の曲がった初老の男であった。どうも彼は、私と王子・王女との連絡役というか、現世と小人の国とをつなぐ門番という感じでもあった。その男は、王子と王女が現れるという

想像の遊び友達

のまにか消えてしまうのである。時々現れることもあり不思議な存在であった。彼ら3人が現れるのは、私が一人にいる時だけで、しかも場所も決まっていた。祖父母の家の二階の和室の角の柱の近く。日が明る時だけで、夜は出なかった（夜は私が帰ってしまうし、祖父母の家に泊まった時でも夜はその部屋に行ったことはなかった）。畳に敷いたじゅうたんの上で彼らは存在した。実際に見えるわけではないのに、私の頭の中で動く彼らが目に映り、それがじゅうたんの上で動いているのだった。彼らはもちろん話をする。それを私は心で聞けるのだ。私は声に出さなくても心の中で話すことで、彼らと話げできた。今思うと一番不思議なことは、彼らと握手できたことだった。触覚があるのだった。髪に触ったやわらかい感触、肩に触ったら骨のごつごつとした感触があった。ある時、私がまた例の部屋に居るとばっと目の前に白い雲が現れたのである。2センチぐらいの雲がすーっと飛んだ。それは目に映ったのではなくて、実際に見えたのである。「ああこれは小人の国から私を連れにきてくれたのだ」と信じて、私はそれ以来外に出ると空の雲を眺め迎えを待った。その後、小学4年になってからは、自分で鍵を持ち、家へ帰ってから鞆を置いてから祖父母の家に遊びに行くようになった。その時期を境に小人たちの現れる回数は減り、私が中学に入ってクラブに忙しくなり、あの部屋にほとんど行かなくなるともう現れなくなってしまった。

C1. 「神様・保護者」タイプ：神や仏を「想像の遊び友達」と考える人は、私の知るかぎり欧米の研究者にはいないように思われる。神についてのイメージがわたしたちと違っているためかもしれない。私たち日本人にとっては、神様や仏様は色々な小動物に乗り移って姿を現わしたり、夢枕に立ったりする存在である。また、憑依霊や背後霊や守護霊といったものの話題も一般に広く受け入れられている。このような文化を背景にして、日本の子どもたちの中には、自分自身に固有の小さな神や守護霊的想像の存在を持っている者が少なからずいる。それらは半ば実在的にとらえられしかも他者的性格を持っている。よって、それらを「想像の遊び友達」の特殊な形態とみなすこともあながち不自然ではないように思われる。このようなタイプの「想像の遊び友達」を持った者は、計7名であった。内2名は、はっきりとした実在の宗教と関連してそれらを持ったということであった。1人は、〈A1-3〉で紹介した被験者である。もう1名は、カトリックの幼稚園で守護天使がいると教えられたため、自分の背後にはいつも守護天使がいると思ひ、トイレに入る際には天使と一緒にこないよう素早くドアを閉めたりしていたという被験者である。残り5名の持った「神様・保護者」タイプの「想像の遊び友達」は、実在の宗教とは無関係な私的な想像力によって生み出されたもののように思われる。具体例を示す。

〈C1-1〉 空想の友達という具体的な人物は持ったことがない。ただ、3～4歳の頃から心の中にある人物（それが何か今も分からない）がいた。その人物は、私が悪いことをしたり心の中で反省する必要があると思っている時に出てきた。私が心の中で「ごめんなさい」と思うと、その人物は「そうやって謝れば許してくれるよ。きっとどこかで誰かが今の君の気持ちをかかってくれるよ」というようなことを私に投げかけた。そんなことが何十回と繰り返されるうちに、私は心の中で謝ればいつか報われると思うようになった。おそらく、私はその頃神様（何でも見ていて一番正しい判断をする人）のような何か絶対にいると信じていたのだろう。私の心の中に出てくる人物は、神様と私とを繋げる「つなぎ」の役をしていたのだと思う。私は、幼い頃から現実を真正面から見るのが恐くて、その人物が出てくることによって、神様が私を何時も見ていて助けて救ってくれるという依存する安易な方向に逃げていたことが今分か

想像の遊び友達

る。今の私に、以前ほどではないがまたたまにその人物が出てくる時がある。そんな時、自分自身でまだ弱いなあとと思う反面、神様を信じていた頃の自分の率直な汚れなき心を懐かしくも思う。神様がないことを分かっているながらも、また別の心のどこかで神様がいてほしいと願っていたのである。私の場合、母が勤めに出ていたので、母親に見てほしいとか一緒にいてほしいと思う時に必ずしも母が側にいたわけではない。その反動として、神様がいつも私のことを見ていて正しい判断をしてくれるという形で望みをかなえようとしていたのだと思う。

<C1-2> 今まで誰にも言ったことのない不思議な存在が私の中にはある（一時は精神異常ではなにかと心配したこともある）。それは名前もなければ姿もはっきりしない。また、声が聞こえるわけでもない。性別はたぶん男の部類である。はっきりしてるのは、それが私の運命を左右したり（そこで、例えば私は楽しみにしている旅行の日まで病氣や自己に遭わないようにその人物にお祈りする）、私に罰を与えたり（人に親切にできなかったりするととても困ったことが私に起る）、私と対話する（私の自身のことについて私と色々話す）ということである。このようなことが長年続き、常に外から私を観察している者がいて、それが以上のように私を励ましたり私に注意や罰を与えたり、私と私のことについて話したりしてきた。しかし、このレポートを書いているうちに、そういったものは実は私の幻想かもしれないと思うようになった。その人物は、心の弱い部分を補強するために無意識の世界が働いて生まれるものだと思う。

<C1-3> 中学2年の期末試験の時、私は夜遅くまで勉強していた。疲れ切ってもうやめて寝ようかと思った時に、ふと「もうちょっと頑張りなよ」という声が聞こえてきた。私が「だあれ」と聞くと、「僕だよ」という声だけが頭の中に聞こえてきて、「まだやるべきところまでやっていないだろう。もう少しやらなきゃ」。その声は私を励ます。私は何だかやる気になって、ラストスパートをかけ、そしてやるだけやって寝た。次の日の試験は好調で、ほとんどできた。試験を終えた後掃除をしながら私は満足感に浸り、保健のテストは満点かもしれないとルンルン気分でした。するとまた昨夜の音が聞こえてきて「本当に100点取れたの」と聞いてくる。私は「もちろん自信があるもの」と答える。その声は「そうかな僕はもう一度確かめた方がいいと思うけれど」と何度でも言う。テストは出してしまったので確かめるわけもいかないと悩んでいると、友達がちょうど明日のことを職員室にいる先生に聞きに行こうと言うので、一緒に行った。先生が私の顔を見て私の答案から先に採点してくれた。私は記号で書くべき所をすべて単語で書いていた。全部ベケになるところを、私と友達とで先生に泣きついて必死になって頼み、「大ボーナスおまけ」とすべてマルにしてもらった。おかげで点数が良かった。その後、その男の子の声を聞くことはないが、以上のことは今でも何か不思議な気持ちがある。今現在私は夜寝る前に、神様ではない目に見えることのない宇宙の何者かに向かって地球の平和と地球のすべての人々の幸せを願う。夜は私を不思議な気分にし、私を不安に引き落とす。その不安を払い除けようと私は祈る。

<C1-4> 小学校の頃から高校1年ぐらいまで神様（既成の宗教とは無関係）と呼んでいる私だけの存在があった。姿は見えず声も聞こえないけれど、私の意見を聞いてくれ（必要としたのは助言ではなく聞いてくれることだった）願いをかなえてくれ、私の存在をすっぱり包んでくれる存在と認識していた。神様に会おうのは夜寝床について眠りにつくまでのほんの少しの時間だった。真っ暗な天井を見上げ、一日の出来事を報告し願いごとを祈って眠った。中学の頃日記を書いていたが、兄に読まれ悔しく、それ以後日記に本当の気持ちを綴ったことはない。また、母とは些細なこともよく話したが話が父に筒抜けになっているのに気づき内容を吟味するようになった。思っていることを一方的に神様に吐き出してしまうのが自分の気持ちの整理になった。幼い頃は父・母・神様という二重三重のパリケードに守られているという安心感があればこそ、真っ暗闇の中でも眠ることができた。今も、パリケードの敷こそ減ったが、どんな危機に直面しようとも私は神様に守られているという気持ちはある。神様はまだ私の中に存在している。このレポートを聞いた時少なからず驚いた。私以外にも空想の友達を持っている人の存在を知ったからである。

想像の遊び友達

C2. 「妖怪・怪人」タイプ：お化けや妖怪のたぐいも、それらが半ばリアルな存在で他者のなものであることを考えれば、当人がそれらとなんらかの形でコミュニケーションするならば、定義から言ってそれらを「想像の遊び友達」にみなすことができる。今回の調査ではこのタイプに該当するものは、以下の例に示す1名のみであった。厳密に言うところの事例も、先のB1-3の事例と同様に、「想像の遊び友達」の定義の条件を十分に満たしていないとも言える。それは、この事例の場合その他者の存在と被験者が十分にコミュニケーションしているとはみなしがたいからである。しかし、ここでも恐怖心を対他的なエモーショナル・コミュニケーションとみなし「想像の遊び友達」の特殊例に含めることにする。

<C2-1> 空想の人物がまったくいなかったわけではない。その人は友達ではなく怖いおじさんだった。そのおじさんは暗い時にだけ出現した。私は暗い所に1人である時にはいつも、カーキ色のシャツとグレーのズボンを身につけギラギラと光る包丁を右手に持ったものすごい形相のおじさんがすぐ後ろにつけて来ているように感じていた。そして、もしも振り向いてそのおじさんと目が合ったらきつとその包丁でぐさっと刺されるのだとおもっていた。だから、特に夜中にトイレに行くのが怖かった。手を洗う時も目の前にある窓ガラスにおじさんの姿が映っていると思い絶対に前を見ようとはしなかった。廊下もどこかに映っているかもしれないと思い半分目をつぶって歩いた。おかげで、ドアや壁によく足や頭をぶつけてあおあざを作っていたような記憶がある。小学校の4年生ぐらいになって“こんなおじさんなんかいるわけがないんだ”と思い始め、暗い所に行っても“怖くない、怖くない。誰もいないんだから”と自分に言聞かせて、それが妄想であることを自分に分からせようとした。そのせいか、6年生頃にはそんなおじさんのことは気にせず暗い廊下が歩けるようになった。しかし、今でも暗い所にいるとふとぞっとしてあたりを見回してしまうことがたまにある。今でもそのおじさんのことが気になっているのかもしれない。

D1. 「実在の人物」タイプ：実在する他者も、当然のことながら想像の人物たりうる。例えば、密かに憧れている人がいたとしよう。その人が現前しないところでその人のことを色々考えたり空想したりすることがあるだろう。その時、その空想されている人物は、実在であると同時に今現前せず想像されているにすぎないという意味で、どこかしら「想像の遊び友達」に似てくる可能性を持っている。一般に、他者とは、それが実在する者であれ常にこのように“想像された他者”という影を持った存在とも言える。実在する他者をイメージ化し、その像を半ばリアルに思い浮かべてその存在とコミュニケーションするといった「想像の遊び友達」のタイプを、「実在の人物」タイプと名づけることにする。このタイプの「想像の遊び友達」を持った者は2名いた。

<D1-1> 小さい頃から今に至るまで、同じ人物の「空想の友達」を持っている。彼は幼稚園時代の友達である。幼稚園以来、高3の時に12年ぶりに偶然の機会に再会するまで、まったく話をしたことがなかった。その間、彼の姿は幼稚園時代の幼いままで、声は自分の想定した声を当てはめていた。中学の頃からテニスコートで彼の姿を見かけるようになる。声と姿は実在の彼と同じである。空想の友達だが、姿は見えるし声は聞こえるし、会話もしているしほとんど現実の彼と同じである。私は空想好きで、小学

想像の遊び友達

校3～4年頃から色々空想し始める。一番盛んだったのが高校時代である。当時本当の気持ちを打ち明けられる友がいなかったので、空想の彼を頼りにしていた。私にとって空想の友達には3つの役割を果たしている。1つは、私の味方。私の勝手な空想の中のみ登場させて私が正しいと私に賛成させる。幼い時から高校まではもっぱらこの1の役割。2つめは、よき相談役。対立意見を彼に持たせてどっちが正しいのか考える助けにする。これは最近になっての彼の役割。3つめは、永遠的な友達役。私のなりたいようになり、して欲しいことをしてくれる。以上、空想の友達は私にとってかけがえのない友達であり不可欠なもの。高3の時、週2～3回通学の際すれちがい言葉をかわしたりしていた時、現実と空想との区別がつかずに困ったことがあった。

<D1-2> 5歳頃よく隠れんぼをした。私は隠れるのが上手でなかなか見つからなかった。そんな時、頭の中に思い描いたお姉さんとよく話をした。姿も見えず声も聞こえなかったけれど、実在の人物であると思っていた。「私隠れるのが上手でしょ」などと話していた。一人でいるときよく彼女が現れ一緒に話をした（以上はA1タイプの「想像の遊び友達」）。小学校3年になって、私はバレーボール部に入った。そこにとっても可愛くてやさしく素敵な先輩がいた。異常なほどこの先輩に憧れた。彼女の前では緊張して声も出せなかった。彼女の夢をよく見、日記には彼女の事ばかり書いていた。1人でいる時には、先輩を思い出しては話しかけていた。現実とは違い、空想の先輩は私に応えたり話しかけたりしてくれた。目には見えず、声も耳からは聞くことができないが、頭の中でその声を聞き取り、その言葉に対して自分が話すという風な感じだった。当時、この空想の先輩を実在のものとは思っていなかった。だからと言って、空想のものとも思っていなかった。何か、空想の世界と現実の世界がごちゃ混ぜになっていたような気がする。

D2. 「亡き人」タイプ：広い意味では「実在の人物」タイプの「想像の遊び友達」の中に含めることのできるものとして、亡くなった人のイメージを半ばリアルに思い浮かべその像と交流するというタイプの「想像の遊び友達」がある。今回の調査では、このタイプとみなせる事例は1例しかなかった。しかもこの事例は以下に示すように、純粋なD2タイプというよりは、A1の「秘密の友達」的要素も兼ね備え、またC1の「神様・保護者」的要素すら持った混合型（D2-1のこの事例はA1タイプの例としてもC1タイプの例としてもカウティングした）であった。そこで純粋なD2タイプの事例として、今回の調査の分析から排除した被験者自身の調査による聞き書きの資料から1つのサンプルをD2-2として紹介する。あくまでも参考資料とみなしていただきたい。

<D2-1> 私には空想の友達のリカちゃんがあった。彼女は幼なじみと言えるような親しい友達のいなかった私にとって唯一の親友だったかもしれない。当時から彼女が実在の人物ではなく自分の空想の世界の住人であることは承知していた。事実姿を見たことは一度もなかった。声のみ聞くことができた。人形遊びをしている時にも彼女の声がかえった。他人から見たら1人遊びに見えることが、私にとってはリカちゃんとの楽しい遊びだった。近所の年上の怖い女の子の命令で、近所の駄菓子屋からチョコレートを食べる。彼女と一緒にそのチョコレートを食べている時「おいしいやろ」と言ったが、私には苦かった。その時リカちゃんの声がかえった。「どうして意地でも逆らわなかったん、でもそのチョコレートの苦さを絶対忘れたらあかんで」と言った。その声は20年間で聞いたリカちゃんの声の中でも最も悲しげで最も心に残る声だった。小学校に入学して中高を経て大学生である現在に至るまで、リカちゃんはずっと私の側にいる。だが今では昔のようにリカちゃんと話して遊ぶことはなくなり、苦しい時や悲

想像の遊び友達

しい時にその声が聞こえる程度である。マラソンで友に差をつけられへたりこんでしまいそうになった時、推薦入試に失敗して本試験を前に眠れぬ日々を過ごし自暴自棄になっている時、リカちゃんのささやき声で何度救われたか数えきれない。実は、彼女は私の中の良心・正の部分ではないだろうか。私は1人っ子だが、この世の光を見た瞬間に命を失った姉がいた。直子と名づけられた姉の分まで率直に一生懸命生きたいと思う心が、リカちゃんとなっていていつも私の側で囁いているのかもしれない。きっとリカちゃんは、私がリカちゃんの思うように生きられるようになるまではずっと私の側にいることだろう。

<D2-2> 友人から聞いた話。その家の家族構成は両親と兄と妹の4人だった。この兄が友人の同級生だったと言う。小さい頃何らかの理由で妹のAちゃんが亡くなる。それから、その家族ではそのAちゃんが生きているようにしているという。食事の時もAちゃんの分も作っているし、父親は人形を買ってきてそれをAちゃんにしているという。風呂の順番も決まっていて「今度はAちゃんの番」と言ったりしているという。友人の同級生であるこの兄にはこのAちゃんが見えるという。ある時演奏会の帰り彼の父親が車で迎えに来た時のことである。友達も一緒だった。車が近づいた時、彼が「あっ、Aちゃんも来たのか」と言うので、友人は「何も見えないよ」と言ったところ、「あのキーホルダーがブランブランしている所の横に乗っているじゃないか」と教えてくれたらしい。そして彼は車の横で「Aちゃんも迎えに来てくれたのか、楽器を取ってくるからそこに座って待ってて」と話しかけ、また声も聞こえるらしく「今日は風邪で声がかれてるね」などと語りかけたという。彼女は年とともに成長しているらしい。家族全員がそのAちゃんを中心に動いているようだ。空想の友達ではないが見えるとか聞こえるというあたりは似ているのではないかと思う。こういう存在は小さい頃になくなってしまうもののような気がするが、彼はこの時高校生である。また父親も母親もAちゃん存在を信じているらしい。もっとも、Aちゃんというのは実在した人物だからもっともらしく存在しているようであってもいいような気はする。

以上において「想像の遊び友達」には、8つのタイプがあったことを具体例と共に示してきた。これらの分類の中で特に、C1の「神様・保護者」タイプやC2の「妖怪・怪人」タイプの事例については、従来の研究ではまったく言及されてこなかったように思われる。「遊び友達」という用語にこだわれば、C1・C2タイプのものを「想像の遊び友達」に含ませるのは不自然に感じられるかもしれない（もしこれらを除外すれば、本調査で「想像の遊び友達」を持っていた者の人数は21名になる。これは全体の約14%である）。しかし、欧米の研究でも、言葉通り「遊び友達」ということにこだわられているわけではなく、「想像の相手」と言われることも多い。よって問題は、それとどういふインターアクションがあるかということではなく、むしろそれが実在しないにもかかわらず他者的存在として半ばリアルに知覚され、それとのインターアクションが生じること自体であると言えるだろう。このように広義に理解して、C1やC2という従来まったく手のつけられていない領域にも研究を広げることは有意義なことのよう思われる。大切な問題は、「想像の遊び友達」という少女趣味的なファンタジーの存在ではない。問題は、想像世界と現実世界との関係、あるいは現実の他者や自己と想像された他者や自己との関係を説明することである。このように考えるならば、「神様・保護者」タイプや「妖怪・怪人」タイプの想像された他者も「秘密の友達」タイプの想像された他者も、「想像された他者」という意味では等価であると言える。

(c) 「想像の遊び友達」のリアルさについて

「想像の遊び友達」は、その所有者である子どもには非常にリアルに知覚されていると一般には言われている。例えば、Ames と Learned (1946) は、リアルであった「想像の遊び友達」の具体例をいくつか紹介している。その1つは次のようなエピソードである。ある知能の高い2歳後半の女の子は、サーカスで2人の道化師を見て以来想像の彼らを家にまで連れてきて客室に住ませるようにし、ベッドには彼らが寝た証拠に凹みがあると語り、また本当の客人が宿泊する時には、ベッドが取られ道化たちの寝るところがなくなると悩んでいたという。この女の子は見えない道化を本当に知覚していたのだろうか、それとも知覚した“ふり”をしていただけなのだろうか。

Hurlock たち (1932) の調査によると、「想像の遊び友達」を持っていたと語った青年女子31%のうち81%（つまり女子全体の約25%）が、青年男子23%のうち60%（つまり男子全体の約14%）が彼らの「想像の遊び友達」がリアルであったと証言している。「想像の遊び友達」の声が聞こえたと想像して「想像の遊び友達」と会話をしていた者は、「想像の遊び友達」を持っていた女子の79%（全女子の約24%）男子の43%（全男子の約10%）である。「想像の遊び友達」がどの程度リアルなものであるのか客観的に論じるのには、方法論的にも特有の困難さがある。それは、本人の行動を外から見るだけでは彼が単に“ふり”をしているだけなのか本当にそのように知覚して行動しているのか判断しがたいからである。Svendsen (1934) は、親の目から見て子どもが「想像の遊び友達」をリアルにとらえコミュニケーションしているように見えるサンプルのみ（3歳から16歳の40名）を集め、一人一人に「想像の遊び友達」のリアリティについてインタビューした。結果次のように語っている。個人個人でインタビューの様子にずいぶん違いがあったものの、全体としてはある年齢による傾向があった。子どもたちは、しだいに「想像の遊び友達」を“ごっこ的 (make-believe)”なものとして認知するようになる。移行期は、5～6歳頃にあるようである。また、ある5歳の子は「僕の心の中で彼らを見ることができる」と語っている。Svendsen はこのような表現から考えると、子どもはひょっとすると最初から現実の友達と想像の友達について何らかの区別をしているのかもしれないと述べている。

5～6歳頃から「想像の遊び友達」は“ごっこ的”性格を持つようになるのではないかという以上の Svendsen の指摘は、彼女の調査のもう一つの結果、子どもたちは5～6歳頃から「想像の遊び友達」についてオープンに語るのを止め次第に秘密にするようになるという結果と合わせて考えると、簡単には納得しがたい。子どもは次第に「想像の遊び友達」と遊ぶことが周囲の人々に歓迎されないことに気づき始めるのである。つまり、自己と他者との間には「想像の遊び友達」についての評価や知覚に不一致があることに気づき始める。子どもが、そのようなずれを意識し「想像の遊び友達」を秘密にし始める時に、それを“ごっこ的”なものとして語り始めたとしても顔面どおりに信用できるだろうか。子どもは、それをリアルなもの

想像の遊び友達

として主張すれば大人たちがあまりいい顔をしないことに気づき始めているのである。また、心の目にしか見えないもの、頭の中に直接聞こえてくる声、他人には見聞きできず自分にしか分からぬもの、これらはリアルではないのだろうか。何がリアルで、何がイマジナルなものか、このような問いは簡単には答えきれない問いである。むしろ筆者は、このような問いに答えようとする道の1つとして、「想像の遊び友達」の研究を位置づけたい。

今回の調査の結果得られた「想像の遊び友達」のリアルさにまつわる情報を、以下に整理していくことにしたい。今回の調査は、「姿が見えたか否か」・「声が聞こえたか否か」・「リアルであったか否か」などの項目をたてイエス・ノーの回答を求めなかった。ただ、それらについても記述してほしいと要請した上で自由記述してもらった。この自由な調査様式のおかげで「想像の遊び友達」の独特のリアルさと実在性の曖昧さがかえって浮かび上がった点もあるように思われる。データを整理する前に断っておきたいことが幾つかある。今回の調査で「想像の遊び友達」を持っていた者は25名であった。しかし、同一人物が異なる2つのタイプの「想像の遊び友達」を持っている場合が5ケースに見られた（例えばD1-2を参照された）。よって、分析した「想像の遊び友達」のタイプ別の総個数は30になる。また、同一の「想像の遊び友達」を1つのタイプに分類しがたく、異なるタイプに重複して分類したケースが2例あった。その1つは、A1・C1の例としてもカウンティングしたD1-1の事例である。もう1つは、A1とA2に重複して分類した事例である。よって、各分類カテゴリー下のケース数を合計すると33になる。

①「姿が見えたか否か」：30ケース中姿が見えていたと思われるものは14ケースあった。ここで姿が見えていたと判定したケースの具体例は、A1-1, A1-2, A1-3, A2-2, B1-1, B1-2, B1-3, B2-1, C1-1, C2-1, D1-1などである。しかし、一応このように判断したものの、「姿が見える」ことの意味は思いのほか複雑である。頭の中に姿をイメージ化できるということを「姿が見える」と述べた被験者もおれば、イメージは浮かんだが「姿は見えなかった」と述べた被験者もいる。例えば、A2-1の被験者は、「想像の遊び友達」の姿はよく知っていたが目には見えないと述べているし、D1-2の被験者は、姿も見えず声も聞こえないが頭に思い描き実在すると思っていた「想像の遊び友達」について語っている。B2-1の被験者は、実際に見えるわけではないが頭の中に描く「想像の遊び友達」がじゅうたんの上で動くのだと述べている。あたかもイメージが外の世界に投射されるのだと語っているかのようである。このような場合、「姿は目に見える」と言えばよいのか「姿は見えていない」と言えばよいのかいずれが適切なのだろうか。B2-1の被験者はイメージの投射と区別して2センチ程の雲が飛び去るのを本当に見たと語りもしている。どうも「姿が見える」という言葉の意味には、複雑な階層的構造があるようである。例えば次のような階層が考えられる。

1. 姿についての情報がまったくない。
2. 姿を概念として知っているが視覚イメージ化さ

想像の遊び友達

れていない。3. 姿の視覚イメージがある。4. その人物の静止像ではなく自由に動く視覚イメージが浮かぶ。4. その人物の自由に動く視覚イメージを単に頭の中に思い浮べるのではなく、外界に投射してより立体的に映像化する。5. その姿を他の実在物と同列に目によってリアルに知覚するが、その像には独特の特徴がある。例えば、突然出現したり消失する。像がかすれているなど。6. まったく他の実在物と同列に知覚されるが、他人には知覚できない。7. まったく他の実在物と同列に知覚されるが、自分を含む特別な仲間には知覚できない。8. 一般の人々に知覚することができる。

「像が見える」という言葉の意味には、大雑把に考えただけでも2～8の7つの意味がある。また誰もが常にこのように自分のイメージや視覚像について分析的に判断し分類できるわけでもないだろう。すなわち本人自身が2～8のいずれであるのか分からなくなってしまう事態も充分考えられるのである。例えば、夢は2～8のいずれにも分類しがたい。4のように考えられるのは、あくまでも目が醒めた人物の夢についての事後説明としてでしかない。夢を体験しつつある人にとっては夢は何よりもリアルな世界である。それは多くの場合夢ですらない。夢が夢であると分類されるのは、夢から醒めた視点においてである。「想像の遊び友達」と現在進行形でコミュニケーションしつつあるものが、その知覚像のあり方について果たして冷静にカテゴリー化できるであろうか。「想像の遊び友達」の知覚やその存在のリアリティについて云々されるのは、「想像の遊び友達」を持たない視点、いわば夢から醒めた視点からである。夢を見たことのないものが夢について研究するのが難しいのと同様に、「想像の遊び友達」はそれを持たなかった者が研究するのは本来困難なことである。「想像の遊び友達」を持つ人々の体験世界を理解するために私たちにしうる唯一のことは、あらゆる先入観を捨て謙虚に「想像の遊び友達」を持っているあるいは持っていた人々の言葉に耳を傾けることであるように思われる。今回の被験者の語ってくれた報告の中にも「想像の遊び友達」現象を理解するためのいくつかの手がかりがある。以下にそれを示す。

(1)自分の「想像の遊び友達」を他人が知覚しないといって驚いたものは一例を除いてまったくいなかた。例外は、B1-3のケースである。このケースは標準的な「想像の遊び友達」の事例というよりは、白昼夢や夢に近いケースである。また、2～3歳の時の出来事でもある。よって、一般に「想像の遊び友達」を持つ者は、他者がそれを知覚できないことに特別なショックを感じないようである。

(2)「想像の遊び友達」の視覚像を非常にリアルに現実と見紛うように知覚している者(例えばD1-1)から何となくぼーっと漠然と知覚したり(例えばA1-3)、頭の中だけで見ている者や、姿は知っているが見ることのできない者まで様々な段階が存在していた。

(3)「想像の遊び友達」のタイプとの関連ではっきりしたことが2つあった。「白昼夢・ドラマ」タイプと「メルヘン・妖精」タイプに属する計4例は、すべて視覚イメージを伴

想像の遊び友達

っていた。これに対して、「神様・保護者」タイプの計7例の大部分5例は視覚像がまったく存在しないようであった。残り2例のうち1例は、カトリックの幼稚園で先生に見せられた守護天使の像が自分の背後にいと頭では思っていたが突然振り返って守護天使を目で見ようとしたが失敗していたケースである。この場合、視覚イメージは知識としてのみ存在していたと言える。もう1例は、視覚イメージについてはっきりした記述がないものの存在していたようにもとれるC1-1のケースである。「神様」的なものは、どうも視覚イメージを持たぬ場合が多いようである。

② 「声¹が聞こえたか否か」：30ケース中声¹が聞こえていたと思われるのは14ケースあった。ここでも、視覚の場合と同様、問題が錯綜する。「耳に聞こえる」と「心の中で聞こえる」と「頭の中で聞こえる」のは、どのように違うのだろうか。ある者は現実と同じように聞こえていたと語り(D1-1)、ある者は耳からは聞こえないが頭の中で声を聞き取っていたと語る(D1-2)。この両者の知覚体験がどの程度同じでどの程度違うのか、直接比較するすべはまったくない。しかし、被験者たちの記述を比べると何らかの体験の相違もあるように推定される。「想像の遊び友達」の声の質にまで言及したり、一人の時などは実際に声を出して会話をしたと述べている者(A1-1)もおれば、声はまったく聞こえなかったと述べている者もいる(A1-3, C1-2, C1-4, C2-1)。「想像の遊び友達」の声というものは、その知覚イメージと同様に独特の位置を占めているようである。自分に聞こえてくる「想像の遊び友達」の声が、他者に聞こえなかったことにショックを受けたと述べた者は1名もいなかった。そういう意味では、耳から聞こえていたように記述している者も、「想像の遊び友達」と現実の人物とをまったく同列に考えていたわけではないようである。

③ 「リアルであったか否か」：姿も見え声も聞こえていたように思われる「想像の遊び友達」は、30ケース中8ケースあった。筆者がそのように判断した具体的ケース名は、A1-1, A2-2, B1-2 (前半はA1タイプ後半はB1タイプ、この2ケースとも), B1-3, B2-1, C1-1, D1-1である。この中には、データだけではそのように判定しがたいケースも含まれているかもしれない。すでに見てきたように、声¹が聞こえ姿が見えるということの意味をはっきりさせること、それ自体が難しいのである。また声¹が聞こえ姿が見えたからと言って、必ずしもその「想像の遊び友達」が実在していると信じ込まれていたわけではない。例えば、声も聞き姿も目にしていたA1-1の被験者は、「想像の遊び友達」が実在しているとは真剣に思っておらず自分の心の中で作り上げたものと承知していたと語っている。この言葉から判断すると、彼女は自分の「想像の遊び友達」を自分の想像の産物と自覚していたと言える。しかし、この言葉を額面どおりに受け取ってよいのかどうか難しい問題である。というのはA1-1の被験者は、「想像の遊び友達」が時と場所をかまわず授業中でも平気で話しかけてくるので非常に困り「想像の遊び友達」に怒りを感じたりもしたとも語っているからである。どうも「想像の遊び友達」は、自分の想像の産物ではあるが自分のコントロー

想像の遊び友達

ルや意志を越えて自己に働きかけてくるものでもあったようである。また、A1-1の事例とは反対に、姿は見えず声も聞こえなかったが「想像の遊び友達」を実在の人物であるとみなしていたりするケース(D1-2の前半)も存在する。以上のような事例から考えるならば、そもそもイマジナルということとリアルということを背反するカテゴリーであるかのように語ることが間違っているのかもしれない。神は存在しているのだろうか。私たちは神を通常の物質のように知覚できなくても、神の実在を確信する場合がある。私たちが表象能力を持っているということは、私たちが現前しないものをイメージし、その存在について思いをめぐらすことができることを意味している。知覚できないものの実在を信じることができるのは、私たち人間の大きな能力の1つである。「つちのこ」のようにその実在が信じられていたものの幻のまま終わった「想像の遊び友達」の例を以下に紹介する。なお、この事例は「想像の遊び友達」の事例にはカウンティングしなかった。

<N1-1> 3歳の時に祖父からピンクの電話機を買ってもらった。ダイヤルが回せて、受話器も外すことができた。小さな時のことはあまりはっきり覚えていないが、その電話機の話は今でもよく覚えている。とても気に入って、毎日それで遊んだ。そのうち、私はこの電話の向うには自分と同じ年頃の女の子がいるんだと信じ始めた。その子とどうしても話がしたくて、何度も何度もダイヤルを回しては受話器に向かって「もしもし、もしもし私はあやちゃん、一緒にお話しよう」と話しかけた。しかし、返事がない。そこで私はきつと電話番号が違うから女の子が出てこないのだと考え、それ以降は正しい電話番号を探し当てることに熱中した。結局、電話の女の子は返事してくれなかったのだが、私はずっとこの女の子は実在すると信じ込んでいた。返事なかったので、女の子の名前や姿も分からないままだった。しかし、当時はいつかきつと返事してくれると期待していたので、頭の中で髪型や服装や声の高さや話し方を想像しては、本当はどんな感じの女の子なんだろうと胸をわくわくさせていた。私が想像した女の子は、自分がしてみたい髪型をしており着てみたい洋服を着ていた。自分をその女の子に重ねあわせていたのかもしれない。姿も見えず声も聞こえず名前もないこの漠然とした「空想の友達」を持ったのは、3歳から4歳までの1年にも満たぬ期間だけである。当時私にはあまり友だちがいなかった(一緒に遊べる子は2人ほどしかいなかった)。幼稚園に入り友だちがそれまでの何倍にもなると自然とその女の子のことは忘れてしまっていた。(この報告者はC2-1と同一人物である)。

この被験者は、姿も見えず声も聞こえぬ女の子の実在を信じていた。このこと自体には不思議はない。私もまだ直接知覚したことのない数多くのものの実在を信じている。アンドロメダ星雲、スフィンクス、ニューヨークなどの実在を信じている。不思議なことは、なぜ彼女が受話器の向こうに女の子の声を聞かなかったのか、なぜ彼女と会話できなかったのかということである。私たちはすでに何人もの報告者が「想像の遊び友達」の声を心の中で聞き、頭の中で対話すると語っているのを知っている。なぜ、彼女はそのような声を知覚しなかったのか。筆者のそれに対する答えは、彼女はあまりにも受話器の向こうの女の子の実在性を信じていたために、それがためにかえって女の子の声をリアルに知覚できなかったのではないかということである。つまり、本当にある女の子がいてその子の電話番号が分からなかったとしよう。正しい番号を回しさえすれば電話がつながると信じていれば信じているほど、電話がつな

想像の遊び友達

がるまで女の子の声が聞こえなくても当然なのではないだろうか。かえって声が聞こえないことがその女の子の实在性を証拠だてているように思われるのではないだろうか。これと反対に、安易に受話器から女の子の声が聞こえてくるようなことがあれば、かえって女の子の实在性が疑わしくなってしまうのではないだろうか。「想像の遊び友達」のリアリティについて、次のような矛盾した構造が存在しているように思われる。その实在性についての確信の度合いと、それをよりリアルに知覚する度合いとの負の相関関係である。つまり、「想像の遊び友達」の实在性を信じていればいるほど、その「想像の遊び友達」を目前においてリアルに知覚する可能性が少なく、逆に「想像の遊び友達」の实在性を否定しそれが自分の想像の産物にすぎないと自覚していればしているほど、その「想像の遊び友達」を目前においてリアルに知覚する可能性が高くなるということである。これを、「想像の遊び友達」の实在性と現前性との分離と呼ぶことにしたい。このような实在性と現前性の分離が存在しなければ、その時、その「想像の遊び友達」はもはや想像の産物ではなくある種の実在と言いうる位置に達する。实在性と現前性（リアルな知覚可能性）の一致は、いわゆる物的実在の基本的特徴の1つである。平たく言えば、「百聞は一見に如かず」ということであり、私たちは直接目で見たり耳で聞いたり手で触れたりすることのできるものの実在を信じる傾向があるということである。「想像の遊び友達」においても、その实在性と現前性に一致が見られる場合がある。今回の調査でそれに該当するケースは、2ケースあった。1つは、D1-1のケースである。この場合「想像の遊び友達」は実在の人物だった。よって、「想像の遊び友達」の現前性がありさえすれば、その「想像の遊び友達」の实在性というよりはそのモデルになった者の实在性によって、实在性と現前性の一致が生じたとも考えられる。この場合、彼女が自分の想像で生み出した現前する像それ自体の实在性を信じていたのではないとすれば、厳密な意味では实在性と現前性の一致と言えないかもしれない。もう1つのケースは、「想像の遊び友達」が共有されていたケースである。1人で「想像の遊び友達」の实在性と現前性との一致を支えることは、それはいわば1人で全世界と対抗しようとすることである。それは不可能ではないにしろ並大抵のことである。しかし、仲間がいれば、共同性があれば1人で困難なことも可能になる。

<A1-4> 小学校4～5年の時に同級生のYさんに共有させてもらった「空想の友達」を持ったことがあった。その「空想の友達」はPという名で、Yさんもお母さんから譲ってもらったということだった。姿は見えないが声は聞こえる。名前は忘れたがPというイニシャルがついたことは覚えている。YさんがPについて話してくれたのは、クラスの女の子の半数ぐらいがいる時だった。Pは女の子で非常に高い声で歌うような声を出し、姿勢は見えないのでよく分からないが、風のようなもので常にYさんの側にいるということだった。また、Yさんが認めれば別の子とも共有できるということだった。それを聞いていた私たちはみな羨ましく思った。なぜだか忘れたが、おそらくYさんと仲が良かったため、私はPの友達になることを許された。その時から、Yさんに聞こえるPの声は私にも聞こえ、私に聞こえるPの声はYさんにも聞こえるようになった。声といってもはっきりしゃべっているのではなく、高い声でまるで口

想像の遊び友達

笛を吹いているような鈴が鳴っているような感じの声だった。その声あるいは音によって、今Pが何を思っているのか何を言わんとしているのか、伝わってくるのである。だから、Pと会話をするということはめったになかった。Pとどうして分かれ離れになったのか記憶はない。Yさんと仲たがいたわけでもない。今考えると嘘のようで小学生のたくましい想像力の産物にすぎないようだが、当時はPの实在を絶対的に確信していた。「空想の友達」がいることも別に異常には思っていなかった。人にしゃべらなかつたのは、単に信じてもらえず他人にあれこれ詮索されるのが嫌だったからにすぎない。

d 「想像の遊び友達」の共有について

今回の調査で、「想像の遊び友達」を持っていた25名の中で他人とそれを共有していたのは2名にすぎなかつた。その内1名は、A1-4の報告者である。もう1名は、共有といってもさらに変則的な共有であった。小学校1～2年の頃、近所の1年上のKという女の子が西風さんや東風さんや南風さんに手紙を出そうと提案したので、手紙を書きそれを紙飛行機にして窓から飛ばし風さんの返事を待っていると、本当に風さんから手紙が届き、京子とかみどりという名の女の子だった西風さんや東風さんの实在をすっかり信じていたという報告である。風さんと手紙でコミュニケーションしたのは2週間ぐらいだったか、その後も暴風雨や風が強い日などは風さんが怒っていると思っていたそうである。そして、つい最近友達のKさんが1人5役ほど色々な風さんのふりをして手紙の返事を書いていたことに気がついたということである。これは共有といっても、Kさんはその風さんという「想像の遊び友達」を持っていたとはいいたがたいので、複数の者がその存在を信じていたという意味での共有とは違ったものである。共有の事例からこのケースを除くと、真の共有とみなせるのはA1-4の1ケースのみになる。

実在と呼ばれるものは何か、これは難しい哲学的問いである。実在しているものと想像されているにすぎないものとは一体どこが違うのだろうか。私たちは、あるものが実在していると想像することがある（例えば人間に似た火星人が実在していると想像できる）し、また想像されたもの（例えば人間に似たタイプの火星人の）の实在を信じることもある。実在とは一体何なのだろうか、「あるものが実在している」という言明は一体何を意味しているのだろうか。実在しているものと想像にすぎないものとの間には、日常の生活世界では厳然たる区別があるように見える。実在のパンと想像されたパンとを混同するものはまずいない。しかし、原子は実在しているのだろうか、フロギストンは実在していないのだろうか、神は実在しているのか否か、などと考えていくと両者の境界は判然としなくなってくる。しかしながら、問題を整理していく手がかりがまったくないわけではない。実在すると考えられているものには、1つの共通する特徴があるように思われる。実在と呼ばれるものは、必ず間主観的な（共同主観的な）認識や知覚を基礎にしているという特徴である。つまり実在しているものに関しては、もし“私”がそれを知覚できれば“あなた”もそれを知覚できるはずなのである。すなわち実在するものは共同的に知覚され、そしてその实在性について共同的な承認がスムーズに成立すべきものなのである。

想傷の遊び友達

「想像の遊び友達」が現実の友達ではないのは、一般の人々にその姿や声が知覚できないからである。もし、一般の人々の誰もが「想像の遊び友達」を知覚しそれとコミュニケーションできるのであれば、それはもはや“想像”という名に値しなくなる。「想像の遊び友達」の実在性を信じている人がいる。片やその実在性を信じていない多くの人々がいる。その姿や声を見聞きする人がいる。しかしながら、他の大勢の人たちはまったくその姿を見ず声を聞かない。ここでは、知覚の共同性や実在性についての共同的な承認が成立していない。「想像の遊び友達」の存在は、人々の間にコミュニケーション・ギャップあるいはパーセプション・ギャップが存在していることを具体的に物語っている。「想像の遊び友達」の実在性と現前性の分離は、「想像の遊び友達」が人々に間主観的に知覚されておらずその実在性が人々に承認されていないということを、「想像の遊び友達」の所有者が認識していることを示しているとも言える。「想像の遊び友達」を共有してくれる他者が存在すれば、その時その「想像の遊び友達」の実在性と現前性との分離は小さくなり、2人の世界の中ではそれは限りなく実在に近づいていくものと考えられる。2人が3人に、3人が4人にというようにそれを共有する人々の集団が大きくなっていけば、その方向の極限においてある別の新しい実在世界の誕生について語る事ができるかもしれない。

「想像の遊び友達」がどのように複数の人々の間で共有されるのか、「実在世界」と「想像世界」との境界を考えていく上で非常に興味深いテーマである。Svendsen (1934)によると、「想像の遊び友達」を持っていた40ケース中3ケースのみが兄弟間でそれが共有され、5ケースにおいてそれが実際の友達との間で共有されるかあるいは共通の話題の対象になっていたという。その内の1人である5歳の女の子は自分の持っていた「想像の遊び友達」について現実の友達が理解してくれないので精神的に動揺したという。別の5歳の男の子は、「想像の遊び友達」を幼稚園に連れて行き先生に紹介したという。意外なのは、40ケースともすべて家族の中ではその子どもの持っている「想像の遊び友達」について自由にオープンに語られていたという指摘である。Ames と Learned (1946) は、「想像の遊び友達」には家族の者の話題にされるものや、人と共有されるものもあると述べている。そして「想像の熊」を共有し合っていた姉と弟の事例を紹介している。また、「想像の遊び友達」を学校に連れていく子どもも、ほんの数名ながらいると語っている。Manosevitz たち (1973) によると、大部分の子どもが他の子どもが遊びに来ると「想像の遊び友達」と遊ぶのを中断したという。ここでも意外なのは、「想像の遊び友達」を持っている子どもの親で、「想像の遊び友達」が害になると考えていたものがわずか4%で、それを持つことに反対した親も7%しかいなかったという調査結果である。「想像の遊び友達」を持つ子どもの親の62%がそれを持つことが子どもに好ましいと考え、50%の親がそれを持つことを奨励していたという。筆者が受講生の女子学生たちに、もしあなたの子どもの「想像の遊び友達」を持ち1人でぶつぶつしゃべったりしているとすればあなたはどう感じるか、正常な発達過程の1つとして黙認するかあるいは異常と思うか、と口

頭で尋ねたところ、大多数の学生が気味が悪いのでやめさせると答えた。日本と欧米で「想像の遊び友達」に関して差異があるとすれば、それはまだ「想像の遊び友達」が本格的に秘密にされない4～5歳以下の時期における親や周囲の者の「想像の遊び友達」に対する態度の違いであるように思われる。日本では、子どもたちの「想像の遊び友達」を承認する社会習慣はまったく存在していないと言える。「想像の遊び友達」の共有についてのみならずその許容・承認というテーマも、今後さらに研究していく価値があるように思われる。

4. まとめと今後の課題

「想像の遊び友達」とは何かというテーマについては、本論ではまったく触れてこなかった。それは、本論の目的がまず「想像の遊び友達」現象の日本における実態を明らかにし、現象の構造を描写する点にあったからである。以上において本論では、「想像の遊び友達」が日本でも欧米と同様に一般性のある現象として存在していることをすでに示した。また、それらには8つのタイプが区別できることも指摘した。ここで「想像の遊び友達」とは一体何かという問題に軽く触れ、今後の研究の進むべき方向の1つを示唆しておきたい。

現実の他者は、どの程度イマジナルな他者なのだろうか。このように少し奇妙に思われる問いを今少し続けてみたい。想像された他者は、どの程度リアルなのか。私は、どの程度リアルな私で、どの程度イマジナルな私なのだろうか。机や椅子の実在性と他者の実在性とは同じ“実在性”なのだろうか、机や椅子の現前性と他者の現前性とは同じ“現前性”なのだろうか。“私”の実在性や現前性について果たして語りうるのか。このように考えていくと、すぐに気がつくことがいくつかある。

1つは、自己や他者といった社会関係的存在と物的存在と考えられる机・石・花といった存在について、実在性・現前性やリアル・イマジナルなどといった事柄に関して、両者を同列に論じられない点があるということである。“人的なもの”と“物的なもの”とは、その存在としての性格がまったく異なったものである。両者の本質的な違いは、“人的なもの”は私たちにとって単なる認識・知覚・情動の対象となるだけではなく、認識・知覚・情動を分かち合う相手にもなるという点にこそあるように思われる。“想像の机”と“想像の他者”との違いは、この点から生じてくるのではないだろうか。“想像の机”をリアルなものとしてイメージ化するのは、多くの場合孤独な作業である。例えば、私が“想像の机”が実在の机としてそこにあると主張しても、たいていの場合誰もそれを認めてくれない。私がそれでもなお断固そこに机があると主張し続ければ、しだいに周りの人たちは変な顔を始めるだろう。では、“想像の他者”を持つことと“想像の机”を持つこととはどこが相違しているのだろうか。ここで“想像の机”という場合、イメージが実体化された普通の机のことを意味している。話をしたり感情を持った机のことではない。なぜこのように断るかというと、実際のピアノや毛布を

“人的なもの”として知覚しそれを友達や保護者に行っていた学生も少なからず存在していたからである。“想像の他者”を持つことも“想像の机”を持つと同じくらい孤独な作業である。しかしながら、前者には前者の存在を支えてくれる仲間が存在している。その仲間とは、その“想像の他者”その人自身である。“想像の他者”はそれが想像されたものにすぎないとは言え、その所有者にはある種の“他者”・“仲間”に他ならないのである。その意味で“想像の他者”は“想像の机”のように単に実体化された物的対象ではない。彼は、その所有者と世界を共有し合う“仲間”なのである。そして“想像の他者”とその所有者が共有し合う最初の対象は“想像の他者”それ自身なのである。“想像の他者”の場合、必然的にそれを共有してくれる“仲間”を伴っているという意味において“想像の机”に比べ実在により近い存在と認識される傾向があると言えるかもしれない。

2つめに気づくのは、私たちにとって現実の他者それ自体がどこか「想像の遊び友達」に似た側面を持っているということである。私たちは対話する存在である。他者について考える時、私たちの頭の中である他者の像が動き始める。私たちは、その頭の中の他者とも対話する。頭の中の他者は、一体誰なのだろうか。それは私が思い描いた具体的なある人物なのだろうか。すでに見てきたように「実在の人物」を「想像の遊び友達」にする人もいるのである。大部分の人たちも、そこまでイメージを実体化することはないにしても数多くの実在の他者のイメージを心の中に持っているといえる。私たちは、果たして他者に会うことができるのだろうか。私たちが他者と思っているのは多くの場合、目の前の知覚対象に投影された私の内部に住む「想像の遊び友達」にすぎないのではないだろうか。頭の中にいる私たちの対話相手である他者は、「実在の人物」ではなく「もう一人の私」ではないのか。そのような「想像の遊び友達」を持つ人のいることもすでに見てきた。このように自分の中に「もう一人の私」や「内なる実在の他者」を持つ「私」とは一体何者なのだろうか。Mead (1934) は、対話主体である「私」が形成されていく身振り会話から有意味シンボルへの発展過程に、以上の多くの問いに対する答えがあると考え、「想像の遊び友達」についても述べている。筆者もかつて、自己と他者との基本構造が形成される2歳頃に「想像の遊び友達」の事例が報告されていることの意味について述べた(1985, p. 180)。「想像の遊び友達」の問題は、自我や自己の発生を考えていくうえで、数多くの手がかりを与えてくれる。また逆に、「自己や他者」の発生・発達を解明することなくして、「想像の遊び友達」について十分に理解することはできないとも言えよう。

<付記> 日本では、「想像の遊び友達」について語られることがほとんどなく、研究されることもほとんどなかった。よって、日本において「想像の遊び友達」を持っていた人々・子どもたちは、そっと人知れず自分だけの王国を持っていたと言える。私は、その王国に足を踏み入れ、その高原に咲く草花を分類しこのような形で発表してしまった。本論を読んでくださ

った方が、子どもたちの内なる王国を、好奇心という土足で踏みにじらないことを願いたい。とは言え、このように発表しつつそのような願いを人にする事自体あまりにも自己中心のかとも思っている。アメリカが発見されなければ、1千万のインディアンが殺されずにすんだのにといい思いがある。私の発見したと思っている王国がアメリカではないことを祈りたい。最後になったが、私の講義を聞き、調査に協力し資料提供を認めてくれた京都女子大学の学生諸君に心から感謝したい。

引用文献

- Ames, L. B. & Learned, J. 1946 Imaginary companions and related phenomena. *The Journal of Genetic Psychology*, 69, 147-167.
- 麻生武 1985 自己意識の成長。「児童心理学の進歩」, Vol. 24, 163-187. 金子書房
- Hurlock, E. B. & Burstein, M. 1932 The imaginary playmate: a questionnaire study. *Journal of Genetic Psychology*, 41, 380-392.
- Manosevitz, M. Prentice, N. M. & Wilson, F. 1973 Individual and family correlates of imaginary companions in preschool children. *Developmental Psychology*, Vol. 8, No. 1, 72-79.
- Manosevitz, M. Fling, S. & Prentice, N. M. 1977 Imaginary companions in young children: relationships with intelligence, creativity and waiting ability. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 18, 73-78.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, & society*. The University of Chicago Press. (稲葉他訳 1973 「精神・自我・社会」 青木書店)
- Partington, J. T. & Grant, C. 1984 Imaginary playmates and other useful fantasies. In Smith, P. (Ed.) *Play in animals and humans*. Basil Blackwell.
- Shaefer, C. E. 1969 Imaginary companions and creative adolescents. *Developmental Psychology*. Vol. 1, No. 6, 747-749.
- Svendsen, M. 1934 Children's imaginary companions. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 32, 985-999.
- Tanous, A & Donnelly, K. F. 1979 *Is your child psychic?* (荻洲照之訳 1979 「子供はみんな超能力者」 徳間書店)
- 我妻洋・原ひろこ 1974 「しつけ」 弘文堂